

第 122 回 有田国際陶磁展  
美術工芸品・オブジェ部門 審査評

審査長 マルテル坂本 牧子

明治 29 (1896) 年に本展の前身となる第 1 回陶磁器品評会が開催されてから 130 年という節目の年。このたび、長い歴史を持つ有田国際陶磁展の審査に初めて参加させていただき、大変光栄に思っております。継続は力なりと言いますが、これだけ長く続く公募展というのは他に類を見ません。日本の磁器発祥の地において、作り手たちの切磋琢磨の機会として、早くから高い意識を持って本展を続けてこられたことに、「有田」という窯業地としての矜持を感じます。今回は、美術工芸品・オブジェ部門の応募総数が昨年より 2 点増えて 107 点を数えたことも、大変心強いことだと思います。

一次審査では、まず各審査員が 30 点ずつ作品を選び、協議の上、入選作品 70 点を選びました。二次審査では、一次審査で 3 票と 2 票を得た作品から入賞 15 点を選ぶべく投票を行い、先に上位 5 点を選びました。この時、一次審査で高い評価を得ていたものの、作品の完成度を厳しく精査した結果、賞候補から外すものも出てきました。その後、得票数の多いものから 1 点 1 点、各審査員が意見を出し合い、残り 10 点を決定しました。

最高賞の文部科学大臣賞を受賞した富川秋子氏の《氷青釉銀彩鉢「粉雪」》は、サイズは小さめながら、すっきりとしたシャープなフォルムと、明るい青の釉薬のグラデーションが美しく調和し、最初から目を引きました。表面にふわりと施された銀彩がキラキラと輝き、見る者の心に余韻を残す作品だと思います。

第二席の佐賀県知事賞を受賞した今田拓志氏の《炭化彫紋文のある陶》も、非常に控えめな造形ながら、完成度の高さで存在感を示した作品です。轆轤成形による端正な鉢型に彫りを入れることで、二重構造のような立体感を加え、炭化によるモノトーンのグラデーションにより、その効果を高めています。

第三席の有田町長賞を受賞した植木薫氏の《波》は、磁器ならではの魅力を存分に活かした堂々たる存在感を放つ作品です。鉢型を大胆に横に広げ、どこまでも広がっていく海のような壮大さが感じられます。ほんのりと青みがかかった釉薬もフォルムを美しく引き立てています。

第四席の有田商工会議所会頭賞を受賞した浅倉貴子氏の《白の律動》は、細い繊維状となった磁土が折り重なった斬新な造形です。時代でしょうか。今、物質の変容に注目した作品が多く、改めて素材そのもの、焼成によって生まれる現象などをとらえようとする作品が増えています。本展にも、磁土による造形の可能性を新たに問うような作品が見られたことに、期待が持てました。

デジタル化が加速し、AI (人工知能) が存在感を増し続ける現代において、その対極にあるといえそうな「工芸」に、静かに注目が集まっています。素材の持つ物質的な強さ、そして、人間の「手」を用いることによって体現される身体性。何より確固たる実在感を得ることができる工芸が、不安定で混沌とした今という時代を象徴する表現メディアとして、逞しい存在感を放っているような気がします。今こそ、人間回復。やきものはその象徴的な役割を果たすのかもしれない。

伝統があるからこそ、革新が生まれる。この「伝統がある」ということは、本当に大きな強みです。本展が、日本における陶芸表現を豊かにアップグレードしていく、その一つの挑戦の場として、これからも継続していかれることを願っています。